

『もっと老上、ずっと老上～学ぶ楽しさ 人のあたたかさ 明日への希望 をみつける学校～』

2020年度 老上小学校だより No.13(9月4日号)

老 おいかけやま通信

①おきなめあてにむかって ②いどみ つづける子 ③か ながえ 深める子 ④み とめ つなげる子 (校長 山崎 賢)

(学校だより、学年通信・ほけんだより、行事予定、下校時刻などは老上小学校HPでもご覧いただけます)

(レジリアンスを育むために)

「考える文化」を私から

「常識」というのは、最近あまり耳にしなくなった言葉の一つかもしれません。社会の在り方が変わっていく中で、疑問や違和感を持っていても「それが常識や」の一言で片づけられることがなくなっていくのは、むしろ必然なのでしょう。その結果、多くの人が言っていることやしていることについて、自分なりに立ち止まって考えることや多面的に物事を見ることが大事であることが、少しずつ定着してきたようにも見えます。



しかし、このところの自国中心主義や SNS への書き込みに代表される同調圧力は、以前にも増して強くなっているように感じます。失言や失敗に対する寛容のなさや徹底的に相手に攻撃を加えるやり方には、ある種の恐怖感さえ感じます。最近の例でいえば、新型コロナウイルスに感染した人への心ない中傷や、その人が属する企業や学校などへのバッシングにとどまらず、その従業員や学生であるというだけで、排除の対象にされるようなこともあり、大きな問題となっています。

ただ、そのような言動の裏には、自分とは違う考え方の人を排除することで安心感を得たいという個人の不安感の高さがあることを見て取ることもできます。何かにつけて自己責任が求められ、気軽に相談することもできない関係性の中で、自分だけは当事者にならないようにと武装するあまり、少数者への排除や差別的な言動に気づきにくくなっているということがあるのではないのでしょうか。さらには、排除や攻撃をした相手もまた自分と同じように不安感も持っているし、幸せを求めているのだということへの想像力がなくなるほど、窮屈な中で生活しているとも言えそうです。



いわゆる「常識」という概念は薄れてきたのかもしれませんが、私たちは毎日たくさん目の見えない制約の中で過ごさざるを得ない状況にあるように感じます。ちょっとした違いや自己中心的な言動が誰かの目に留まると、瞬間にメディアに載せられ、多くの人の知るところとなります。そして、全ての人の考え方がそうであるかのように、いわゆる「正義」の名のもとに個人や団体を攻撃するスタイルは、このところの定番となってきています。多くの国ではリーダーとされる立場の人でさえ、人の揚げ足取りや人格批判で賛同を得ようとしている姿がよく報道されます。ニュースとして取り上げれば人々の関心を引くだろうと、一部を強調して報道しているということはある程度分かるのですが、あまりにもそのような伝え方が続くと、それが今の社会の新しい「常識」であるかのような錯覚に陥ってしまいます。

二者択一を迫る主張や対人関係も気になります。もちろん、最終的にはどちらかに決めなければいけないことが社会にはたくさんあります。しかし、結果的に同じところに到達するにしても、そこに至るまでの道筋は千差万別です。そのいろいろな道筋の中で修正や合意が図られ、より良いものを目指すことができるのではないのでしょうか。

そのためには、当然ながら時間と労力が必要です。多くのことでスピード化が図られると、どうしても結論を急ぎがちですが、簡単に割り切れないことが多い中で、人々は自分とは違う立場の人の思いも

想像することが必要になってきます。この想像する力こそが、人々の関係を豊かにしたり、差別や偏見をなくすための大事な要素なのですが、2社択一の主張に熱狂する姿のように、「考えない」ことや、「面倒なことには目をつぶる」ということが増えてはいないかと、私自身のものの考え方や捉え方を見直してみる必要性を感じます。



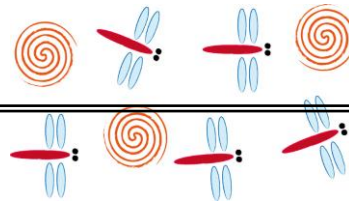
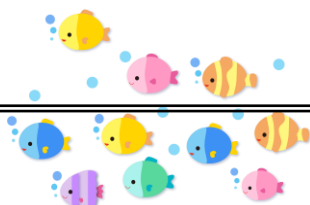
グローバル化が進む中で、様々なことを規制する法律も制定されつつあります。もちろん決まりができるということは、それを作らなければならない現状があるわけですが、私たちは、自分で自分の行動を決める力と、自分だけではない集団の中でどうすればより良く暮らせるかを想像する力を持っています。にもかかわらず、法律で示されていることの抜け道を見つけて自分の欲求を満たすために他の人や集団を差別したり攻撃したりすることが続いています。

学校の子どもたちの姿にも同じようなことが見られます。特に、新学期や担任が変わった時などに、先生はどれだけ自分のわがままを許すのかという試し行動に出る子どもが多くいます。今まで特に気にしなかったことでも、持ち物や学級のルールなど、ある程度示されている学校の基準の抜け道を探して、何とか自分をアピールしている子どもたちの姿が毎年見られます。また、自分に注目を集めるために、授業の邪魔をしたり、だれかにちょっかいを出したりすることもあります。よくない事だとわかっていながら、注意を受けてでも自分への注目を得たいという気持ちの表れです。大人社会の中でも人権侵害をはじめ、様々な事件や事象が続発する背景には、良くないことだとわかっていながら、注目を浴びたいという心理が見え隠れします。それだけ自分が認められないことへの不満、いつ自分が非難の対象になるかの不安などを感じずにはいられない社会の空気があるということなのでしょう。

しかし、その空気は私たち一人一人が作っているのだということにはなかなか気づきにくいものです。少し思い起こしてみても、「自分一人ぐらい」とか、「自分だけやっても」などを言い訳に、様々なことに対して、見て見ぬふりをしている自分がいかに多いかに気付かされます。

かつて、札幌農学校に教頭として招聘された、ウィリアム・スミス・クラークは、学生に対して決められた様々な細かな規則をすべて廃止し、「Be gentleman!」だけにしたと言われています。その結果、門限破りや飲酒などで荒れていた学生が、自分たちで生き方を考え、いかに自分が日本を変える立場の一人なのかの責任と自覚を高めていったと言います。

今こそ、この「考える文化」を作っていくことが大切なのではないかと思います。学校でも、子どもたちの中に問題が起きたとき、「何が問題だったと思うのか」「自分はどうするのがいいと思うのか」ということを、大事に指導しています。そして、たとえ失敗や間違いがあっても、良くなかった原因を自分で振り返って考えられたこと、そして前向きに自分の今後の行動を変えようと考えられたことを評価しています。この「考える習慣」を積み重ねながら「考える文化」を自分から作っていけるよう、子どもにも伝えていきたいし、私自身もそうでありたいと思います。



お知らせ

図画工作や書写等で取り組んだ作品を、市や県、企業などの団体が主催するコンクールに出品することがあります。入選・入賞作品については展覧される場合もあります。また、出品した場合、作品が返却されない場合もあります。不都合がある場合には、9月中に担任までお知らせください。